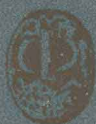


梅原 猛著

地獄の思想

日本精神の一系譜



中公新書

134



中公新書 134

中央公論社刊

梅原 猛 (うめはら・たけし)

1925(大正14)年に生まれる。1948年、京都
大学文学部哲学科卒。現在、立命館大学教授。
専攻、西洋哲学および日本文化論。

著書『美と宗教の発見』

『仏像一心とかたち』(共著)

『続・仏像一心とかたち』(共著)

『現代の対話』(編著)

『未来の対話』(編著)

『新国学談』(共著)

地獄の思想
中公新書 134

© 1967年

検印廃止

昭和42年 6 月26日初版

昭和42年 9 月 5 日5版

著 者 梅 原 猛

発行者 山 越 豊

本文印刷 中央精版印刷
表紙印刷 中央精版印刷
製 本 中央精版製本

発行所 中央公論社

価 230 円

東京都中央区京橋2-1
振替東京34 電話(561)5921代

はじめに

『地獄の思想』は、私の最初の書きおろしの著書である。私が仏像学者と協力して『仏像』の本を書いたのは一昨年であり、二冊の『対話』の本を出したのは昨年从今年にかけてであり、論文集を出したのは今年の初めである。しかし、一冊の本を初めから終りまで、書きおろすのは初めての試みなのである。

今、ここに初めての試みの本を出すにあたって、私の心は、むしろ恐怖にふるえる。まだ、私の母胎は、一冊の書きおろしの本を生み出すほど成熟してはいないのではないか。あるいは、私の生み出したこの子供は、私の勉強不足と出版社の慫慂しやうようのために、いささか月足らずな子供ではないか。この『地獄の思想』という奇妙な名をもった私の子供は、もう一年、あるいは三年、あるいは十年、私の胎内において、じゅうぶん養分を吸収して世に出るべきではなかったか。

私の心にあるこのような反省に、私はなかば同意するのである。けれども、私が今、このような本を書いたのは、私の心のなかにあるつぎのような声に従ったからである。

——ぶしょう者のお前よ。お前の心のなかで、多くの着想が生まれ、育ち、そして消えた。今、お前の考えている『地獄の思想』なるものを、無理な形でも、世に出さないと、それはまたお前

の心のなかで、ある期間生き、そして永久に消えてしまうのではないか。月足らずの子供でも生めば、お前の子となるのである。闇のなかでお前の子をほうむってはいけない。

まして「地獄」は長いあいだお前が親しみ住んだ国ではないか。戦争中に青春を送ったお前は、近い未来に確実に存在するかのような死をみつめる人生を、数年のあいだ送ったではないか。そして戦後、お前が死の不安から解放されたときにも、お前はお前の前に開けている人生の虚妄さに、おどろきあきれ、ほとんど生きる意志を失ってしまったではないか。お前が、しばしばおちいった愛欲や思想の葛藤は、お前に苦悩と絶望を与え、死へのあこがれを起こさせたり、狂気の喜劇を演じさせたりしたではないか。

たしかにお前は、ふつうの人より高らかに笑い、清い認識の喜びを人生から盗むことを知っているけれど、お前の心の深いところに地獄が住んでいるのではないか。もしもお前が地獄の住民のひとりであるならば、地獄の思想はすでにお前のなかに、あまりに長いあいだ、あたためられ続けているのではないか。

とはいえ、お前がこの『地獄の思想』で語ろうとするものは、お前の地獄ではない。お前は、ここで日本文化論の形で、地獄の思想を語ろうとするのだ。お前は、おのれのもっている闇の眼で、日本思想を見た。そしてその時、お前は、日本の思想が、従来に見られなかった新しい相を帯びているのをみた。それをお前は語ろうとする。

たしかに、日本の思想のなかで、多くのものが、まだお前の眼にふれずにいる。お前の認識の欲望は、すべての文献をお前の眼にふれさせ、すべての思想をお前の理性の判定にかけさせ、すべての材料をひとつの体系にもたらしことを望んでいる。しかし、それには多くの歳月が必要であろう。多くの歳月をかけて、お前がこの仕事を完成したとき、お前の未来の著書は光のように明晰になるかもしれないが、そのあいだにお前の熱い心が冷たくなってしまうのか。お前の熱く燃える心を時間によって冷やすより、今、熱い心のままに、ひとつの思想を生産せよ。お前の熱い心が、日本の思想史との出会いにおいてはらんだ子供を、生み出したらどうなのだ――。

もしも心に声なるものがあるとすれば、今、私の心にこのような心の声がひびいている。それは、私が、自己弁明のためにひそかにつくり出した心の声かもしれない。しかし、今はその心の声にすなおに従おう。なぜなら、どちらかといえば、私は怠惰な真理より、勇気ある誤謬のほうを好む人間であるからである。たとえこの本が、多くの点において誤謬をもつにせよ、だれもが語らなかつたいくつかの真理が、この本には語られているはずである。

私は第一部において、地獄の思想の系譜を語った。地獄の思想の意味と、日本思想におけるその位置づけと、釈迦から親鸞にいたるその思想の発展を明らかにした。まだ多くの思想が脱落していると思うが、基本線だけは書きえたと思っている。

第二部は、そういう地獄の思想の視点で、日本文学を見ることにした。『源氏物語』、『平家物語』

語』世阿弥、近松、宮沢賢治、太宰治。まだ評価の定まらない賢治と太宰をのぞいて、これらの作品は、日本文学の最高傑作とされている。最高傑作のなかに地獄の思想が深く入っているとしたら、あとはいわずもがなである。私はここでいわずもがなの文学について論じることとはひかえた。日本における思想、とくに仏教思想と文学の関係については、まだほとんど明らかにされていない。私のこの仕事は、闇のなかに若干のあかりをとしましたものであるが、闇の暗さに慣れた人は、私のともしたあかりを無用なものと思うかもしれない。

目次

まえがき

第一部 地獄の思想

第一章 地獄とはなにか

——地獄思想の発生とその日本思想史上における位置

地獄は仏教の迷信か 人生を苦の相にみる 大乘仏教の二面性 国学者の偏見を排す 日本思想の三つの流れ 生命の思想 心の思想 地獄の思想 鎌倉以後の仏教 日本人の生命力

4 3

第二章 苦と欲望の哲学的考察

——釈迦の思想の意味

忘れられた人、釈迦 釈迦の生涯 四諦説 人間と四つの苦 会う苦しみと別れる苦しみ 欲望の分析 無明と八正道 宗教と近代文明の相剋

27

第三章 仏のなかに地獄がある

——地獄思想の成立と天台思想

48

地獄思想の起源 因果概念の推移 天台思想とはなにか
仏典の時代考証と価値判定 一念三千の世界 人生は空であ
り、仮であり、中である

第四章 地獄と極楽の出会い

——源信の世界

八つの地獄 餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天 日本的センチ
メンタリズムの原型 地獄と極楽の出会い 地獄思想の人間
洞察力

第五章 無明の闇に勝つ光

——親鸞の世界

知恵の人、法然 死の美学から生の哲学へ 煩惱の嘆きを語
る親鸞 末法をみる眼 二つの極楽浄土 東洋の地獄と西
洋の地獄

第二部 地獄の文学

第六章 煩惱の鬼ども

——『源氏物語』

本居宣長の源氏物語論 『源氏物語』の仏教的性格 六条御息
所の執念 心の鬼に苦しめられる柏木 浮舟と二人の男——
薫と匂の宮 愛欲の世界から清浄の世界へ

第七章 阿修羅の世界

——『平家物語』

六道めぐりの物語　冷徹な作者の眼　我執の人、清盛　憂
うる人、重盛　到来する地獄　裸の人間性　運命の抵抗者
英雄のいない戦記文学

第八章 妄執の霊ども

——世阿弥の世界

元曲と能　能の超人間的特質　怨霊の舞い　疎外された人
間のドラマ　貴族社会からの追放者、蟬丸　反逆者、逆髪
の女　老人の邪恋　みごとにドラマトゥルギー　象徴美学の
系譜　二つの邪淫の劇

第九章 死への道行き

——近松の世界

心中賛美のドラマ　近松劇の三つの構造　愛欲の純粹性
女の破滅　男の破滅(一)、『曾根崎心中』　男の破滅(二)、『心中
天の網島』　血しぶきのなかの浄土

第十章 修羅の世界を超えて

——宮沢賢治の世界

地獄と対決する近代の文学者　宮沢賢治と仏教　永遠の生命
賢治はなぜ詩と童話を書いたか　修羅をみつめて　修羅の悲

しみ 菩薩行の精神 修羅の世界から仏の世界へ

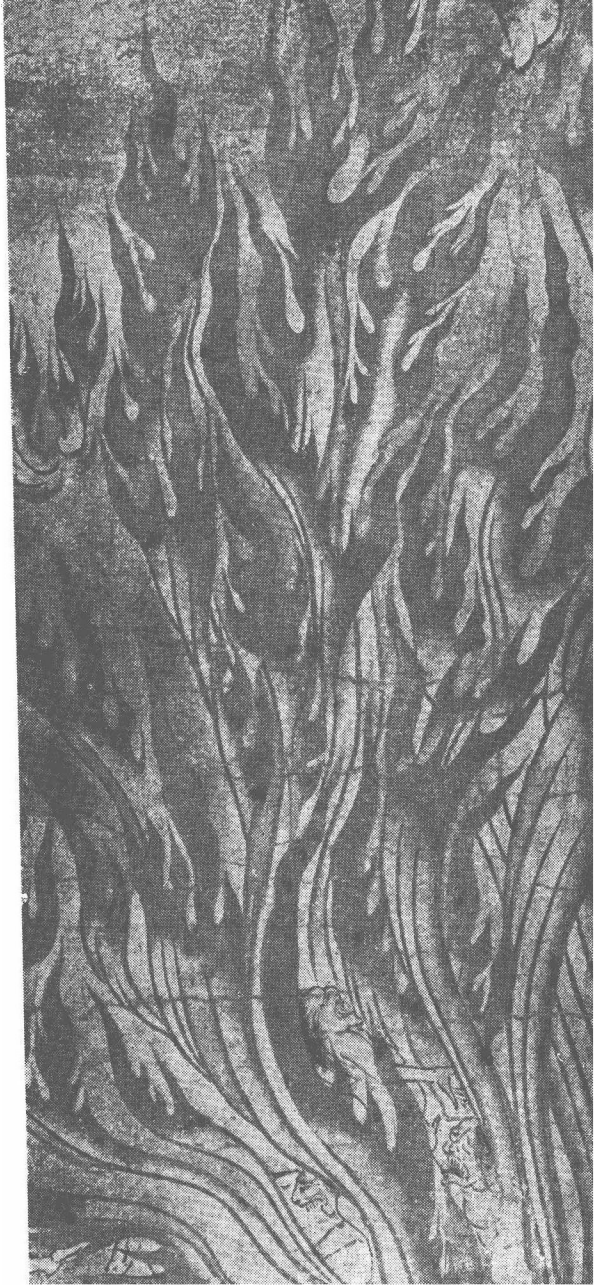
第十一章 道化地獄

——太宰治の世界

強烈な地獄絵の印象 死の前の自己弁明 地主的人間像への
反逆 人生の道化師 マルクス主義との出会い 死にいた
る道 富士には月見草がよく似合う 敗戦から自殺まで
太宰治はなぜ小説を書いたか 太宰と私

あとがき

地獄の思想



第一部 地獄の思想

「春日権現験記」の地獄



第一章 地獄とはなにか

——地獄思想の発生とその日本思想史上における位置

地獄は仏教の迷信か

地獄という人はすぐに極楽を思い出す。地獄、極楽、仏教の与えた迷信。人が悪いことをすれば、死んで地獄へ落ち、よいことをすれば極楽へ行く。だれがそんな迷信を信じるか。

多くの現代人は、地獄といえば極楽を思い出し、それは仏教の迷信であると考え、死んでから行くところ、そんなことはまったくナンセンスだ。生きているうちが大切なのだ。死後の世界などはくそくらえ。こうして現代人は、死後の世界も、死のことも考えようとせず、生に没頭する。そして生のさまざまな歓楽に、情欲や権力欲や出世欲の追求にいそがしい人間は、おのれ自身の死についてはもちろん、おのれ自身の生についてもほとんど考えない。そして、そういう生への没頭とともに、過去の日本人に地獄、極楽という幻想を与えた仏教をせせら笑う。

私はそういう嘲笑が、じゅうぶん理由あるものであると思う。なぜなら、明治という時代において、すでに仏教はじゅうぶん墮落していた。仏教は、葬式をつかさどるものでなかったら、地

獄、極楽という幻想で、人間に道徳的恐怖をふきこむものでしかないように人びとには思われた。こういう仏教に批判がくだされるのは無理もない。福沢諭吉や内村鑑三は、仏教というものをほとんど偶像崇拜としか考えない楽天的信念に生きたけれど、この見解は、徳川時代にすでに国学者や儒学者によってもくだされているのである。儒学者は考える。儒学は理性的道徳の学であり、インテリの学である。しかし仏教は無知なるものの信仰である。無知なるものを、理性によってでなく、恐怖によって道徳的にするために、地獄、極楽の説は説かれたと、儒学者は考える。

地獄の思想にたいするこのような批判は、もし地獄、極楽が、俗仏教のいうような因果応報の思想にすぎないものであるならば、たしかに正しい。そういう迷信から人間をまぬがれさすのは、むしろ啓蒙思想の任務なのである。しかし、地獄、極楽の思想が、もともと、そういうものではないとしたらどうか。地獄、極楽思想が、倫理的な善悪の因果物語と、ほとんど関係をもたないものであるとしたらどうか。また、地獄と極楽がまったく別なものであり、それが結合されたのは、日本では源信においてであるが、地獄は極楽よりはるかに広く、かつはるかに近いものであるとしたらどうか。

俗仏教の因果応報的な地獄、極楽の思想には、いくら輕蔑の眼を投げてよい。しかし、それによって仏教全体を、あるいは仏教の地獄、極楽思想そのものを批判しえたと思ったら、ひどいまちがいでないか。仏教の墮落現象を批判した啓蒙主義者の批判は正しい。いちど日本人は、

誤った伝統から自由になる必要がある。しかし、仏教の墮落現象を通じてしか、仏教を批判できなかった啓蒙主義的な国学者や儒教者や西欧学者は、仏教を浅い現象でしか批判できないという点において、それ自身浅い理性にとどまっていけないであろうか。地獄の思想のなかには、もっと深いなにかが、近代人が見失おうとしながら、なおかつ人生の真実であるなにかがかくれているのではないか。

のちに私が示すように、地獄、極楽が結びついたのは、源信、恵心僧都えしんそうずの『往生要集』においてなのである。恵心僧都から浄土教が始るが、親鸞において、われわれがふつう地獄、極楽と考えるのと、まったくちがった地獄、極楽があった。浄土教は、浄土宗も浄土真宗も布教の手段としては、親鸞よりむしろ源信の思想によったように思われるが、その源信にも、かならずしも、善因善果、悪因悪果としての地獄、極楽があったわけではなかった。もういちどわれわれは、純粹に地獄思想の流れを追求してみる必要がある。

人生を苦の相にみる

地獄と極楽は別の思想であり、しかも地獄は極楽よりも広くて、極楽よりも近い。それが仏教の考え方である。地獄思想は、仏教においてかなり早くから現われる。もっとも早く成立したと思われる釈迦の説法集である『法句経』ほつくきやうや『スッタ・ニパータ』には、すでに地獄の思想がある